昭和63年1月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 21

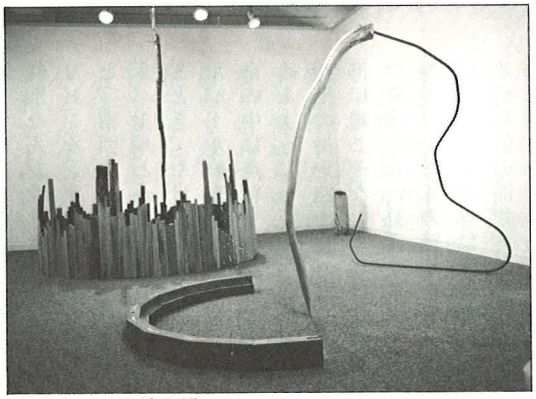
あきないの心

竹内　三賀男

私の父は介良の百姓の長男に生まれたが、青年時代天秤棒一本で独立し、商売を始め、現在の旭町に店舗を構え創業した。それだけに商売は激しい労働と開拓の精神で、早朝より深夜まで働いていた。私の母も商売熱心で愛想良くお客の気持ちを反らすこともなかったので、近隣の人々の信頼も厚く、夕方ともなれば店は門前市をなすような繁昌振りであり、子供心に感心をしたものであった。

しかし私は、商売人が頭を下げ、お愛想を言うことが何となく卑屈で媚を売るように思われて嫌でたまらなかった。ただ店の看板に、信用第一、大勉強と書いてある文字が印象的で心に残っていた。学生時代に応召せられ終戦を迎えたが、極度な食糧難で家業の商売を継承することとなった。戦後は物資が不足し、物を仕入れれば何でもよく売れた。

昭和三十年代となり社会が落ち着いてきたとき、知人の紹介で商業界のゼミナールに初めて参加して驚いた。箱根の山荘に数日間泊まり込み夜を徹して、商売とは何か・あきないの心・新しい店舗の在り方など勉強しており、「店はお客様のためにある。顧客に満足を」という言葉をはじめて教えられた。それはあたかも商人教という信者の集団のように思われた。それで商売は素晴らしい職業であり、あきないの道を通じて社会に奉仕することが大切であり、小売業のような零細企業でも将来は巨大企業に発展することが理解された。現在のダイエーの中内功氏をはじめ、量販店の多くの創業者はこの集団の中から生まれたのである。



「杳容Ⅳ」藤崎幸雄

現在、高知県は国民休暇県構想を推進し、潤いに満ちた豊かな郷土づくりを目指し、瀬戸大橋・高速自動車道の完成を控えて、流通サービス業を軸として産業の活性化を唱えているが、果たしてこれに対する県・市民の心構えは出来ているだろうか。先日開催された「里がえりフォーラム」でも、サービスの悪さが指摘されていたが、これは土佐人が頭を下げたりすることに卑屈さや照れくさい思いをしているのかもしれない。心に思っていても形に表すことが出来なければ本当の心は通じない。何事も原点はお客様のためにあるということを忘れてはなるまい。

特に成熟社会、物余り時代に本県が他県と差別化し得るものは、恵まれた自然と人情豊かで親切心のある人の心であると思われる。今こそ失われた自然環境を取り戻し、意識革命をして二十一世紀を迎えなければならない。

（旭食品㈱代表取締役社長）

インドと高知

河野　典生

「ま、いうならばインドは高知だね」

高知出身の編集者に出会って、そう言ってみると、相手は目を白黒していた。一年のうちに二回、二年半ほど間を置いて、また二回、取材その他でインドへ出掛け、インド狂いになりかかっていた頃のことだ。

「いや、ふとした時に高知を思い出すんだよ。しかも、やけに鮮やかにね。いわゆるデ・ジャ・ビュというのか、前に来たことがあるような、強いなつかしさを感じるんだよ」

私の生家は、高知市西部、路面電車の停留所で言えば鏡川橋の近くにあり、いまでも母と弟が住んでいる。当時は父も存命していた。その父が共同通信の記者で、支局を転々としていたせいで、幼児の頃を別にすれば、高知市に住んでいたのは、戦災と戦後の住宅事情のせいで祖父母に預けられていた、小学六年から高校一年までの五年間である。

だから土佐弁を完璧にしゃべる自信はないが、高知出身の人物に出会うと、文字に書けば東京風だが、次第次第に高知風のアクセントになる。ま、この会話も、そうだったと思って下さい。

「やはり南方指向型なんですね。北ヨーロッパとかカナダ、アラスカなんかよりも、南欧、アジア、アフリカ、南米なんかが好きなんでしょう」

「そう。ポプラ並木の間の道を、コートの襟立てて歩いたりする、ぐっと構えたスタイルよりも、汗をかきかき裸足でぺたぺたなんてやつが、どっちかというと好みなんだ。ま、話を元に戻すけれど、インドは何か特別なんだな。香港、バリ島、フィリピンなど東南アジアも知ってるけど、南西アジア、つまりインドとかネパールとかインド亜大陸方面にいるとき、やけに高知を思い出すんだ。ネパール航空のターボ・プロップで、畠の中に点在する農家の屋根をかすめるようにして、ふいにカトマンズ空港の滑走路が見えて来るあたりは、海岸線こそないんだけれど、高知空港そっくりに見えるし、インドはカルカッタ近郊の祭りの夜、裸電球に照らされて辻々に鎮座ましましている極彩色の泥絵具の大きな神様の絵姿を見ると、あ、絵金そっくりじゃないかと思えたりして……」

ここで、ちょっと自問してみる。なぜ、わざわざインドくんだりまで行って郷里をなつかしんだりするのか、そいつは、少しキザではないか、と。しかし、言い訳をいうようであるが、同じ国内の首都圏にいて、いつでも帰れる立場にあると、案外そうはゆかないのだ。冠婚葬祭で帰郷しても、ほとんどトンボ返りになる。むしろ国外にいる時のほうが、日常の時間から解き放たれて、古い記憶がよみがえったりするのだ。で、私は彼と話を続けた。

「特別なつかしかったのはね。ボンベイから湾内の古い石の仏像があるエレファンタ島へ向かう定期観光船さ。そいつが浦戸湾の例の巡航船そっくりでね」

「は？　何ですか、巡航船というのは」

「知らないのか？　桂浜とか種崎とかを廻るポンポン蒸気の巡航船さ」

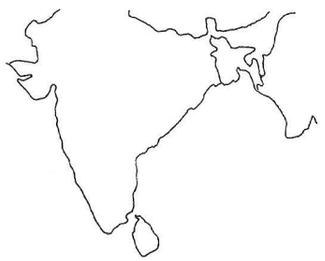
「!?」

しばらくして帰郷したとき、ジェット化された高知空港の滑走路は、カトマンズとは似ても似つかず、新築の空港ビルも、日本国中どこにでもある地方空港のたたずまいだ。

巡航船の話については、すっかり母に笑われてしまった。

「いったい何言いゆうが!?　もう何十年も前からないぞね。前に子供連れて帰ったときも、車で桂浜まで行って、浦戸大橋を渡ってから種崎で泳いだろうがね。それでも、まだ、あると思うちょったが!?」

（作家）



光の音

大家　節子

これはテレビドラマの話。

……（略）……

私が見たのは途中からで私の見なかった初めの部分に父親が娘にこう言って尋ねる場面があったという。

「日光の粒子が物に当たっているときはどういう激しい音を立てているの？」

……（略）……

◇

これは、吉野弘の最近の詩（『失題詩篇二つ』）の一部だが、聴覚障害を持った夫婦とその娘の生活を描いたドラマを背景にしたものである。

彼はこう続けている。「日光の粒子が物に当たって発している音を／聴力を失っている人が目で量っていたことを知って／私は絶句した。」

現代詩といういささか間口の狭いジャンルの中では、吉野弘の作品は平易な表現と日常生活の描写に作者の人柄がにじみ出ており、読む者の心を新鮮な驚きへ無理なく導いてくれるものが多い。この詩の場合もそうであった。

「光の音とは一体どんな音だろう」読むわたしも同じ思いにとらわれてしまう。さかんにはじけ散る光の粒子は、音の洪水のようにほとばしり、わたしたちはそのうず巻の只中にいるのだろうか？　あたり前に思っていた世界が、確かに足元ではぜていた。妙な思い込みがはがれていく快感すら覚えるのだ。

◇

話は少し変わるが、妙に気になるもののひとつに点字ブロックがある。県庁前を中心にわずかに四方へ伸びる歩道に、黄色の帯状に置かれた凹凸のことである。

仕事場が升形に移ってからというもの、歩道を通るたびにその凹凸が気になる。視覚障害者のための歩行補助に一役買うものとして、交差点の小鳥のさえずりと共に登場してどのくらいを経たのか、そう遠くはないと思われるのだけれど、その時期のわたしの記憶は実に不明瞭なものである。関心がない？　意識薄？　光を奪われた人の八〇％は途中失明だというではないか。

放置自転車が歩道の大半を占有している。そして、あの凹凸。視覚障害を持った人たちは、凹凸に沿って歩を進めるのかどうかがひどく気になり始めて、ブロックに自分の足を置いて歩を進めようとした。何とも足元が不安定なのだ。進行方向ははっきりしているのだが、この不安定はいただけない、なんて勝手に思いこんだのだけれど、杖をその溝にそわせていけばいいのじゃないかと軌道修正。それにしても歩道は雑多な物たちが溢れている。

そんな思いに充たされていたのか、その日はよく失明者に遭遇した。路面電車の中で、そして歩道で。

交差点の向こう側を行くその人は自転車のおびただしい列にぶつかり、その転倒に驚いて身をかわすのがやっとだった。もうひとりの人は電車の運転席のすぐ脇の手すりにしがみついていた。小銭をしっかり握って。降りるのを知らせるにも、ボタンを押すのはひどく困難なことに違いない。わたしが出会ったこれらの人たちは皆、一様にこわばっていたように思う。そしてわたしは見ているだけだった。

あの凹凸はこの街に本当に必要なものだろうか。本当に、失明した人たちはそれを享受しているのだろうか。自分を開いていくためにである。ひょっとして点字ブロックの発想は、「光の音」のように一方的な思い込みからの設計ではないのかしらという思いがわいてくる。

その人も失明者だった。それに気づいたのはすれ違ってからのことだった。前に見た人のようなこわばりがなかったせいだと思う。風のように通り過ぎて、「あれっ」と思ったのだ。

振り返ると、そのかたわらを軽やかな足どりで歩いていくものが見える。しっかり鼓動をそわせ足元に動くもの。盲導犬だった。そして、じつに伸びやかなその人の後姿だった。

それからのわたしは凹凸に乗らないでいる。

（主婦）

「無題」筆者作

現代美術の動向(上)

門田　修充

このところ四国各県の方々と、展覧会を持つ機会が増えてきました。それぞれの展覧会の性質には、かなりの相違がありましたが、それでもそこに出品された方々が、各県での現代美術の一翼を担っているであろうことは、間違いないと思われます。そこで、私のかかわったこれら一、二の展覧会について記すことにより、四国における現代美術の動向と、私達を取りまく状況の一端に触れることができればと思います。

◇

八七年四月、徳島公園での『徳島彫刻集団二十五周年記念野外彫刻展』に参加させていただきました。私にとって久方振りの野外展です。ここでは、野外展の一つの典型である、完成度の高い作品が、多く出品されていました。そして、この催しが二十五年という歳月を真面目に彫刻に取り組んできたことを知るのに、十分な力量を見せていました。今、一地方においては、この様に地味ではあっても、足が地についた活動の重要性を痛感している所です。

それにもまし、すこぶる感心させられたことがあります。それは、この長い活動の賜物か否か、定かではありませんが、多くの人々（商工会、県、市、市民の方々等々）の広範囲にわたる力強いバックアップを受けている様子を目にすることができたことです。それにもう一つ驚いたことは、この展覧会が催された公園です。この徳島中央公園は、市の中心部に原生林の小高い丘があり、その周囲になかなかに手のゆきとどいた美しい景観を呈していました。そして、特別な場所以外なら、どこに作品を置いてもよいとのこと、これには二重にびっくりしました。

恐らくここに至るまでには多くの難問もあり、また紆余曲折もあったろうと思われますが、いずれにしてもこのみごとな状況は、私達のそれに比べ雲泥の差であり、驚異に思われました。

七月になり、松山市の愛媛県立美術館の三階で、『ふりいアートミーティング'87展』が催されました。これは山口、広島、香川、高知、愛媛の各県の比較的若い人達による、いわゆる現代美術展という名のガラクタ展です。ここでは、紙や、砂や、木や、我々の身の回りの種々雑多な素材が、所狭しと氾濫して、楽しそうに口々におしゃべりしているようでした。

ガラクタをバカにしてはいけません。それによって、人間の生活を垣間見ることができるからです。丁寧に使用した物には、その歴史が染み込んでいます。そうでない物は路傍の石です。悲しそうなまなざしを私達に向けているように見えます。そんな風に、ガラクタにもそれ自身なかなかに味わい深く、考えさせられることがらが多くあります。

これら二つの展覧会にかかわってみて、また改めて、オルテガ・イ・ガセットの言った「芸術の非人間化」という問題に思いあたりました。それまで、芸術の方向は「芸術の非人間化」へ向かって、一本に集約されるかのように、つき進んできた感があります。それは、人間的な問題―ドラマであったり、生や死の問題であったりという、人間の種々の営みを排除する傾向へと向かって来たことだと思います。観念アートは、その最たるものであったでしょう。

しかし、一九八〇年を境に今まで一本道を走り続けた世の中が、急停車を余儀なくされ、それに呼応するかのように芸術もまた、もう一度後ろを振り返り、眺め直す必要に迫られました。そんな中からニューペインティングの動きは生まれてきたと思います。そして今、確たる方向もなく、出口もなく、試行錯誤しているのみです。

この状況は徳島でも愛媛でも、また高知でも同様であろうかと思われます。

（土佐高等学校教諭）

自由民権百年第三回全国集会に参加して

山口　啓二

久しぶりの、楽しく有意義な土佐の旅であった。史料編纂所の仕事で何度か高知に赴くことはあっても、いつも藩史料の調査に終始し、土佐民権についての史料や史跡に一度も目を向けることはなかった。今回は、高知は初めてという妻（村田静子―日本婦人運動史専攻）を案内して高知城に登ったほかは、三日の間、自由民権との百年を距てた響き合いの中に身を置いていた。

第一日（八七年十一月二十一日）午前の高知市内史跡探訪は、公文豪氏の解説によって、開会集会を前にして課題意識を大いに刺激された。もっとも強い印象をうけたのは植木枝盛の墓と旧邸であった。歩きながら、村の裏山の共同墓地というべき場所に葬られていることと、今日の憲法にひきついでいる彼の民権思想とはどう結びつくのか、また日本国憲案を起草したこの歴史的な建物が、住んでおられる方の賛同をえて永久保存の措置を国民の手で構じるまでは、自由民権百年の運動は終えられないのではないか、などと考えさせられたのであった。

開会集会は、知事選挙戦と重なったこともあって、空席が目立ちはしたが、三回目の高知で、全国からも地元からも、専門研究者や関心をもつ人びとを、二日間で延べ一五〇〇名も集めたことは、大成功といってよいだろう。外崎光広氏の基調報告、江村栄一氏の記念講演もさることながら、福島県三春から、当時三春に赴いた土佐民権家に接し高知に留学し福島事件・加波山事件に加わった民権家の、縁故の人びとが参加されて、壇上に並んで挨拶されたのは、開会集会のハイライトであった。

第二日は「三大事件建白と大同団結」の分科会に出席したこともあって、大同団結から初期議会までを含めた自由民権運動の全過程と、そのなかで果たした土佐派の役割を学び考える機会になった。そして第三日の中村・宿毛史跡探訪は、あいにくの雨天ではあったが、橋田庫欣氏の解説に聞き惚れながら、二日にわたる集会で詰めこんだ土佐民権の新知識を、現場に立つことで反芻できたのはありがたいことだった。

中村から宿毛へ向かう途中で、中筋村九樹の自由の旗を見せてもらったが、それは土佐民権がけっして士族民権に終わらなかったシンボルのように思われた。それほどに第三回集会の基調は、自由民権運動の全過程における土佐派の役割を再検討し、評価し直すことに置かれていたといってよいだろう。

この土佐民権の評価について、自由民権百年の運動に専攻をこえて最初から参加してきたものとして、若干の意見を述べさせて頂きたい。まず、野にたった土佐の士族たちが、政権への道を士族反乱にではなく、自由民権に求めた歴史的意義は、戦後民主主義の危機的状況に立つ今日、きわめて教訓的であると思う。第二に、自由民権へと思想動員するに当たって、馬場・片岡・植木あるいは兆民等の士族出身の知識人の役割は大きいものがあったが、彼らが民権思想を何故身につけることができたのかは、欧米留学・東京遊学からだけでは説明がつかない。彼らの主体的・客観的な歴史的諸条件が問われるべきであろう。第三に、三大事件建白二三府県一〇一件四二、一七八人中、高知一県で三二件二九、〇二七人に及んだところに、土佐民権の新たな拡がりと役割が見られるが、建白署名の三割を占めた香長平野の農民が、土佐の新田特有の永小作とどうかかわるかという問題とともに、土佐の郷士制度によって士族民権なるものも、そもそも農商に深く根付いていたのではないかという問題も、さらに掘り下げてみる必要があるのではあるまいか。

最後に、第三回集会の成功をバネに、自由民権記念館が立派に出来上がることを切望してやまない。

（元東京大学・名古屋大学教授）

第一日目　開会集会

高知の正月——正月神の迎え方

坂本　正夫

土佐では正月にお迎えする神を正月さま、歳徳神、大歳神、御歳神、ほうらいさん、などと呼んでいる。以前の村々では師走になると、子どもたちが、

〈お正月さま、お正月さま
どこまでござった
ばんだ山の裾までござった
何々ょ持ってきた
耳にじくはさんで
腰へ羽根板はさんで
ゆずり葉の蓑で
あかざの杖で
とことこござった

と、いうような唄をうたいながら、正月が来るのを待っていた。

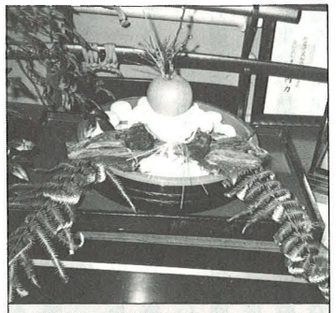
これは佐川町黒岩に残るわらべ唄だが、この唄からも想像されるように、正月神は山の幸、海の幸をたずさえ、わたしたちに幸福と恵みを授けるために遠くから訪ねてくるありがたい神さまだ、というのが日本人の信仰であった。では、土佐では、この正月神をどのようにお迎えしていたのであろうか。

◇

以前の土佐の村や町では、十二月になると、もう正月神を迎える準備が始まった。十三日を正月初め、お松迎え、お注連ぬべ、迎え初め、などと呼び、門松をはじめ正月飾りの品々を取り揃える土地が多かった。恵方（吉の方向）の山へ行ってお松迎えをするが、そのときには「うれしや、おかしや、よろこばしや」などと唱えてから伐る所もあった。迎えてきた松そのほかの品々は、軒下の清潔な所とか井戸端などへ飾りつけをする日まで並べておくが、これをお松やすめと呼んでいる。棚を作り、その上で休める家もあった。夜はこれに供物をして祭り、家族一同がお神酒をいただく。たとえば仁淀村ではなまぐさ（じゃこ）、干し柿、里芋、ごはん、煮しめ、お神酒などを供えていた。梼原町ではこの日をお松さまといい、山から松を伐り出して幸木を作って庭の隅などに積み重ね、夜はお米のごはんを炊いてお神酒、煮しめなどと一緒にお膳にのせて供えていた。

二十七、八日ごろから門松立ての準備をはじめ、大晦日までには飾りつけをする。今では門口に立てるのが普通だが、以前はその年の恵方に向けて立てる家もあった。幡多地方では表座敷の前庭に立てる家が多く、たとえば中村市大用では前庭へ東西になるように立てていた。土佐清水市、大月町などでは、門松を立てる場所に小石が埋めてあり、毎年一定の場所に立てていた家もある。門口と座敷の前庭の二ヵ所に立てる家も、県下のあちこちで見ることができる。

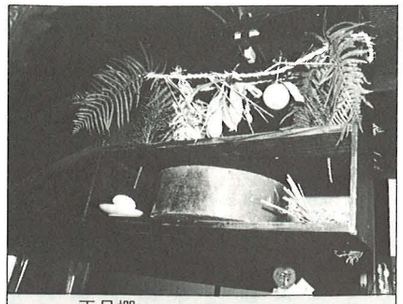
門松を立てるときには、まず支柱になる男木（椎、樫などが多い）を土中に打ち込み、これに三段、五段ぐらいの枝振りのよい松を立てていた。門松の根元には三十センチ余りの割り木を円形に取り囲むようにして立てかけるが、これを幸木といって樫、栗、椎、楢などの木を使い、「九里（栗）四里四方貸し（樫）まわす」のだと縁起をかつぐ所もある。門松は左に雄松、右に雌松（逆の場合もある）というように立てて注連を張り、これにわかば（譲り葉）、ほなご（羊歯）、橙、しめのほ（稲穂の小束）などを吊るしている。



床の間で祭る正月さま
（昭和62年・土佐清水市下ノ加江）

大晦日には餅とおせちを供え、正月には雑煮も供える。正月が終わると、家の内外に飾ってあったお注連などと一緒に丁重に後始末をする。門松は小正月の成木責めや、苗代、田植などとも関連する。

以上のような各地の民俗から理解されるように、門松や幸木は単なる正月の飾り物ではなく、本来は神の依代（神霊のよりつくもの）であり、信仰対象となる木であった。現在では松を立てて、これに梅、樫、竹を配するのが普通であるが、村々を歩いてみると榊、椿、椎などいろいろな木を門松に用いているのを見かけることがある。このように松以外の木を用いていることについて、先祖が大晦日に落ちのびて来て、お松迎えに行く暇がなかったので、近くにあった木で間に合わせたからだ、などと理由づけをしているが、いずれも常緑樹を用いていることは共通している。これは古くは神の降臨を仰ぐための依代は、常緑樹であれば何の木でもよかったのであるが、門松に松を立てる風が一般化するようになってから作られた理由づけだ、と民俗学では解説している。



正月棚
（昭和52年正月・安芸市大井）
撮影：田辺寿男

棚を設けて、そこに正月神を迎えて祭る風も県下全域にある。この棚を正月棚、歳徳棚、若棚、お棚、正月さま、などと呼ぶ。座敷（床の間）、次の間、茶の間などの天井から吊るし、これに注連かざりをし供え物をして祭っていた。常設の棚で、その年の恵方によって左右に自由に回転できるようになったものや、毎年臨時に棚を吊るす家もあるが、後者が古い祭り方である。

安芸市、室戸市などの山間部では常設棚が多く、年々の恵方によって自由に回転できるようになっている。棚の高さ、幅とも六十センチぐらいで二段になっており、上段の上には注連を張り、注連の左右にほなが二枚をはさみ、中央には若葉と橙を吊るし、棚の左右の穴には松の小枝を門松のように立てている。下段には曲物（お重）の底に羊歯を敷きつめ、その上に二重ねの餅を置き周囲には干し柿、田芋などを並べている。吾川村、池川町、仁淀村などでは毎年、恵方に向けて臨時の正月棚を作る家が多かった。

正月神を棚で祭るのではなく、床の間で祭る形式もあるが、これは一番新しい祭り方である。三方や盆に米一升を盛り上げ、それに松竹梅をさした橙をのせ、ゆずり葉、干し柿、なまぐさ、餅、お神酒などを供えて祭る。最近ではほとんどがこの形式になっているが、地域や家によりバラエティに富む祭り方もある。

以上のように土佐の正月神の祭り方には、門松を立てて、そこへ迎えて祭るもの、正月棚と呼ぶ吊り棚で祭るもの、床の間で祭るものの三つの方式があり、それらが複合して行われていた。この三つのうちでは第一の祭り方がもっとも古い方式であるが、門松は最近では正月の単なる飾り物だと考えられ、これに正月神を迎えて祭るという感覚はほとんどみられなくなった。

（高知小津高校教諭）

故郷の雑煮

玖波井加代子

私の生まれた所は愛媛県の南予地方の小さな町です。高知県とは目と鼻の先なのに、そこで作っている雑煮はちょっと変わっています。

何といっても違うのは、具だくさんの雑煮であること。白身魚、海老、かまぼこ、卵、豆腐、大根、にんじん、白菜、ほうれん草、しいたけなどたくさんの材料を使います。野菜以外は丸ごとかぶつ切り、野菜は小さめに切って入れます。こんぶといりこでだしを取り、ほっとするような薄味のすましに仕上げます。薄味だけれども、魚や海老からコクが出て、何ともいえない美味しさになるのです。餅は丸餅を用い、焼いてから入れたりしないで、いっしょに煮込みます。

盛りつけ方も変わっています。餅と野菜は汁とともに椀に注ぎ、海老やかまぼこなどは汁をきり平皿に盛っていただきます。おでんを食べる時のように、何から箸をつけようかと迷うのも、雑煮を食べる楽しみの一つでした。

なぜこのような雑煮が伝わっているのだろうと考えていたら、長崎の友人から嬉しい事を耳にしました。長崎では「雑煮」とは言わず「具雑煮」と呼ぶくらい、具のいっぱい入った雑煮を作るとのこと。しかも私の故郷のものよりずっと豪華版で、海の幸だけでなく鶏肉なども加え、かまぼこに至っては三種類も使うそうです。長崎は中国文化の影響を強く受けている所です。もしかすると、これは中国式の雑煮なのかしらと思ってみたりしました。はるか昔、中国から九州へ、そしてこんな片田舎にまで伝わってきたのかもしれない具だくさんの雑煮のことを想像すると、いっそう愛着が湧いてきます。

では、うちと隣家が全く同じ雑煮を作るかというと、そうではありません。味付けはもとより材料の選択、煮込み加減は、その家の主婦のセンスによるからです。そうなると、雑煮の種類の多さは「郷土の差」というより「家庭の差」ということになります。「故郷の雑煮」というよりは「母の雑煮」と言った方がいいのかもしれません。元旦に、母の作った具だくさんの雑煮を食べると、今年もいい事がたくさんありそうな気がしてきます。

（主婦）

連載■〈街づくり〉の現在4

フォラソンと白書
——まちづくりソフトウェア——

猪爪　範子
〔地域総合研究所〕

新しい戦略が必要

「地方の時代」「一村一品運動」「ムラおこし」などのキーワードが人口に膾炙されるようになって十年が過ぎ、今や第二ラウンドに入っている。もはやモノづくりだけでは地域の活性化は望むべくもなく、小さな町や村といえども独自の情報発信を心がけなければ〝情報ブラックホール〟となって、時代の海底に埋没してしまう。地域間の情報発信競争は一層、厳しい局面を迎えている。

各地で新しい特産品を開発するのと同じように、中央官庁も新しいヒット商品としての〝モデル事業〟を続々と開発するようになった。八〇年代後半の現在、その数は少なくとも百をはるかに超えている。当面の地域振興の大型商品はいわゆるリゾート開発だ。しばらくは、日本列島がリゾートブームに巻き込まれるだろうが、そのうち霧が晴れていくように、その実態も多くの人々の目にはっきりと見えるようになるだろう。だが、本当に生き残れるリゾートはごくごく少数にしか過ぎない。

高知県とても、リゾートだけに執着しているわけにはいかない。もっと地域の中に分け入って、そこに暮らす人々の思いの中から、新しいストーリーと戦略を組み立てる必要があるのではないだろうか。

シンポジウムも新鮮でなくなった

その手始めに、よく行われているのが、いわゆる〝まちづくりシンポジウム〟である。しかし、これも聴く方は少し退屈しはじめた。本当に面白くて為になる話というのは、そうそう聴けるものではない。地元の学識経験者やオピニオンリーダーは、顔見知りの人たちのことを気にせざるをえない立場にいるから、どうしてもその舌鋒は鈍くなりがちだ。土地の気分に疎い外部からやって来るスピーカーの発言に隔靴掻痒の気配がつきまとうのも常のことだ。辛うじて率直で新鮮なことを発言できるのは女性である。ここ一、二年、各地で女性のシンポジウムが流行し、それなりの好評を博しているのも、物珍しさだけでなく、その内容が充実しているからだろう。

次の課題は、地域に暮らす人々が自分の考えや意欲を存分に発揮することだ。だから、時間にとらわれず、長時間にわたり、いつでも、誰でも参加できる新しいタイプのシンポジウムが必要になってくる。もちろん言葉による発言だけが参加ではない。寸劇や音楽などのパフォーマンスも立派な参加である。地元の材料を生かした美味しい食べ物を提供することも素晴らしい参加の仕方である。〝まちづくりは人づくりである〟といった当たり前のことを得意そうにお説教する発言などより、こうしたパフォーマンスの方がはるかに知的で生産的な場合も少なくない。

フォラソンが登場した

1987年11月14日
財団法人 東京市町村自治調査会実施

こうした狙いを込めて、各地に新しく登場した催しが、いわゆる〝フォラソン〟である。これは、マラソンとフォーラム（討論会）の合成語であり、文字通り十時間とか十二時間の超長時間のシンポジウムである。もちろん講演や討論だけでは長時間のプログラムに耐えられないから、先に述べた様々なパフォーマンスやコマーシャルが登場する。これがまた意外に新鮮なので、なまじっかな講演会などより、人々の心に訴えるところも大きい。

すでに八六年二月、北海道の端野町で行われて以来、各地に伝播している。（端野町のそれは『地域づくり』誌第九号、『晨』誌八七年五月号などに紹介されている）

最近では八七年十一月に、東京の多摩地域において新たに開設した一大文化施設「パルテノン多摩」を舞台に『フォラソンTAMA'87』が開催され、東京人の間にも大きな反響を呼んだ。さすがに大都市らしく有名女優やタレントなども含めて五十名ほどの多彩な〝出演者〟が登場し、十二時間のフォラソンはあっという間に過ぎてしまった。

小さな町の例としては、先述の端野町、青森県下田町、島根県桜江町（ここでは『まちづくりアカデミー』と称した）の場合が代表的だが、いずれの場合も、その進行状況や発言内容を、会場に特設した〝ニュース作成班〟が同時進行的に新聞に編集した。議論の内容を書きとめたメモをもとに、あらかじめ用意してあるニュースレターのレイアウトデザインにしたがってワープロ原稿を作成し、印刷する。三十分に一号の割合で発行されたニュースは、会場内はもとより、役場や農協など関係機関に速報的に配布したことによって、その波及効果を高めたことが特色である。この新聞もまた、一種の知的生産力の開発であり、地域懇談会やまちづくり集会などにも十分に応用のきく〝知的生産の技術〟のひとつだろう。

まちづくり白書は静かなベストセラー

もうひとつ、まちづくりの有力なソフトウェアとして、静かな隆盛をみせているのがいわゆる〝まちづくり白書〟である。とりわけ、住民の本音を汲み取り、重要な課題の問いかけ、あるいは新しい提案を世に問う上で自治体のつくる白書の効用は極めて大きい。通常は、こうした作業は役所において、いわゆる総合計画などの形でまとめられるが、これは行政からすれば一種の公式的な宣言書であり、それほど大胆な問いかけをすることは無理である。何よりも、状況を大胆に摘出して、これを面白く人々に示すといった知的構想力に欠けている。

したがって、通常の計画書とは別に白書が必要になるのであり、計画もまた、その一部は白書の中でこそ本領を発揮できる場合が出てくるのである。

こうした自治体のまちづくり白書としての代表例は、一九八二年に発行された東京都中野区の『都市を拓く』という書物である。これは定価をつけて市販されたが、増刷に次ぐ増刷で、この種の自治体の刊行物としては珍しくロングセラーになった。その後、横浜市港北区の白書、徳島県発行の『とくしまニューライフスタイル白書』、東京都墨田区のユニークな産業白書『イーストサイド』など、次々と新しい展開がみられる。最後の『イーストサイド』も市販されており、昨今大流行の〝東京論〟の書物の仲間入りをして、書店のこの種のコーナーには常備の書物になったようだ。

このように、自治体を中心にいま、まちづくりの新しいソフトウェアが次々と開発されている。

さて、今年は四国が島でなくなる、長年の悲願が達成される記念すべき年である。辺境の自縛をふりほどいて新しい高知の将来像がどのように結実するか、楽しみでもある。

現代の〝龍馬〟たちは、どのような夢を描き、どのような戦略を立て、どのような行動をするのだろうか。そのためにも、新しいまちづくりのソフトウェアを積極的に活用してほしいものである。

1987年3月
墨田区商工対策室 産業経済課発行

1987年8月
新とくしま県民運動推進協議会発行

1987年8月3日
横浜市港北区役所区政推進課発行

1982年3月26日
中野区企画部企画課発行

SERIALIZATION

中学生・それぞれの時♥第2回

現代〝お金〟事情

竹内　直人

作家の邱永漢さんの『金銭処世学』（中公文庫）という本を読んでいたら、「どうして学問として、学校で教えないのか、と不思議に思うことが二つある」という文章が目にはいってきた。

なにかな、と思って読むと、一つはセックスのことという。「セックスは本能のしからしめるところだから、教えなくてもしぜんに覚えるものであり、したがって当事者同士の間で片づければよいことだと信じている」から日本人は、「セックスの享楽面ばかりが目について（中略）精神のバランスが崩れて、ノイローゼ気味の社会ができあがってしまう」と、おっしゃる。近年、学校教育においても性教育の分野はかなり注目され、いくつかの実践例が紹介されてはいるのだが、たしかに現場教師の苦手とする〝学問〟の一つであることは間違いない。

もう一つの教えないこと。それは、お金の学問、という。どうして学校で教えないのかというと、邱センセイいはく、「教える側の先生が、お金のことは皆目わからないので、教えたくても教えられないから」とキツい。

邱さんは、「つぎの世代をになう息子たちには、一人前の社会人としてお金との付きあい方、他人との金銭関係のあり方、財産の殖やし方などの〝金銭学〟を会得しなければならない」と提唱されているのであるが、それは私なども大切なことの一つと思う。

彼に「金のことは皆目わからない」と指摘された私たち学校の教師であるが、元小学校教師の経験をもつ作家、灰谷健次郎氏は、こうした生活感覚のもとにある原因として、教員の給料を例に引いて、こう書いている。

「（教員の給料は）やけくそをおこして一晩で使ってしまうほどは安くないし、そうかといって独立した生活を営むには、これはもう、ぎりぎりいっぱいというところである」

「生かさず殺さずという言葉があるが、教員の給料はいつの時代も、そういうところで押さえられているようである。（中略）そうだとすると、これを決めた役人はあっぱれというほかはない。教員にいつも小市民的根性を持たせつづけることに見事に成功しているのだから」（朝日新聞社刊『続・値段の風俗史』より）

＊　＊　＊

さて、今の中学生はどれぐらいの小遣いを親からもらっているのだろうか。

介良中学校の二年生約七十人からアンケートをとったところ、「月に三千円」という子どもが多かった。二年前に、同じアンケートを当時の三年生に答えてもらった時、やはり多かったのが三千円という金額であったから、大人の私たち教師の賃上げがここ数年ほとんどないに等しいように、子どもたちの小遣いのアップもままならぬようである。

お金に対してのうらみつらみは、人間みな抱く感情であるが、次の中学生たちの言葉は泣かせる。

『小学三年のときだった。さいふをトイレに落とした。泣きながら、おばあちゃんに取ってとたのんだ。だけど、いくら泣いても取ってくれなかった。中身はお年玉全部。その正月はくらかった』（K子）

『公衆電話の下に五百円玉があった。しめた。こころがウキウキして、帰り自転車をビュンビュン飛ばした。手をサドルから離した途端、ドブにぶちこけた。五百円玉もどこかに転び、わからなくなった。ぼくはドロまみれ、自転車もドロまみれ』（Y男）

『次の小遣いをもらえる日までの五日間ぐらいが、つらい。ジュースの自動販売機の前ではノドがグビグビ鳴るし、お菓子やチョコレートのあまい思い出が舌の上にひろがる。前の月、小遣いをもらってすぐ、つまらんものにつかってしまったツケがまわってきたんだ』（N夫）

＊　＊　＊

先に述べた邱さんのいう金銭学を学校で教えるべきかどうかは、異見のあるところだろうが、N子の作文にこう書いてあった。

『私が小学生のころの事です。母にお小遣いをねだると、母は私に三十円くれました。それで私は、〝三十円じゃいや、五十円ほしい〟というと、横で聞いていた父が〝何をいう!!　お父さんとお母さんが一生懸命に働いて、この三十円をお前にやりゆう。五十円がほしかったら、自分で働いてみなさい!!……〟この言葉は今だに私の心にのこっています。私の今のお小遣いは、あの三十円が百倍にふえています。お小遣いが三十円のときも、三千円の今も、私にくれるお金は父と母がどのくらい苦労をして得たものか……。この作文を書きながら、父と母の汗でよごれた顔が浮かんできます』

お金や物でかんたんにつられる子ども、テストの点数がよかったら〇〇円あげる、という親が、ふえている。

こうしたなかで、お金の大切さを、労働の厳しさのなかから、わが子に伝えられたN子のお父さんの子育ては見事だと思った。

私は、お金のねうちというのは、やはり労働の所産という視線のなかから伝えるべきものと考えている。

N子は学校で教えることができない大切な事柄を父母から学んだ。

学校で教えることができないこと、このことを大事にしたい。子どもの生活をもっと実りのある、楽しく、美しいものにするには、野にあるたくさんの人びとや、自然から、学ぶということなのだろうから。

子どもたちの生活を、親といっしょにつくるということとは、どういうことであるのか、N子の作文から教えられた思いである。

＊　＊　＊

とは言いつつ、お金と人間の関係は、いつでも、どこでも、実に、実に、シンコクでタイヘンな問題である。

「金は天下のまわりもの、っていうが、そうじゃなくて、金は天下のまわしもの、じゃないかと思います。ああ、ただの紙きれなのに、つかってなくなると、どうしてこんなにつらいんだろう。国の法律で、一人に一日、三百円ぐらいずつお小遣いを配るようにならんかなぁ」（U男）

マッタク、同感――。

（高知市立介良中学校教諭）

ちなみにお年玉の額をみると、八四年の高知相互銀行の調査によれば、九三・一％の家庭でお年玉を出しており、一家庭平均六・二人に一九、七二二円を出費、一人当たり平均は三、一六九円ということである。（『みんなで知ろう高知県経済』高銀地域経済振興財団刊より）

高知市近代年表（九）

大正五年（一九一六）

3月　県立図書館、現県庁西端付近に落成（昭和二十年七月戦災により全焼）

5・5　片岡健吉銅像除幕式

8月　九月にかけてコレラ流行、患者数三百四十余名

10月　柿沼竹雄、知事に就任

10月　升形に映画常設館「出雲館」開業

大正六年（一九一七）

2月　高知商業銀行創立（昭和六年破産）

3・15　江ノ口町を高知市に編入

4・20　第十三回総選挙（政友会百六十五、憲政会百二十一、国民党三十五、無所属六十）

10・30　米人飛行家F・チャンピオン、飛行大会の際鴨田に墜落死、柳原公園に記念碑建てられる

10月　土佐捕鯨株式会社設立

11・7　ロシア十月革命成立

12・24　中島和三、高知市長に就任

12月　南海製氷株式会社設立

◇この年、江ノ口に塵芥焼却場を建設

大正七年（一九一八）

2月　太平洋汽船株式会社、高知製材株式会社、高知教育品株式会社設立

3月　市立工業学校廃止

8月　富山に始まった米騒動、全国に波及。高知市は8・15から12・15まで米の廉売実施（内地米一升二十五～三十銭、外米十五～二十銭）

9・29　原敬内閣成立、陸海外三相を除く全閣僚に政友会員を任命

10月　十二月にかけスペイン風邪大流行、高知市の死亡者六百六十五名に

11・11　第一次世界大戦終結

12・11　帯屋町に公設市場設置

大正八年（一九一九）

3・5　福岡孝弟逝去（八五）

4月　阿部亀彦、知事に就任

4月　私立城東商業学校（高知学園発足の母体）、北新町に開設

7・16　板垣退助逝去（八三）

大正九年（一九二〇）

1・10　国際連盟発足

1月　高知鉄道株式会社（後土佐交通から土佐電気鉄道に）設立

3・10　県庁舎新築落成

4・5　私立土佐中学校開校

5・10　第十四回総選挙、政友会大勝（政友会二百七十八、憲政会百十、国民党二十九、無所属四十七）

9・27　朝倉連隊シベリア出征

10・1　第一回国勢調査（内地人口五五九六万三〇五三人、外地人口二一〇二万五三二六人）

10月　県物産陳列館を県立商品陳列所と改称

11・3　高知市庁舎、改築落成

12月　高知巡航株式会社設立

◇この年、基督教婦人矯風会高知支部設立

大正十年（一九二一）

2・29　林有造逝去（八三）

3月　県会議事堂落成

5月　高知ホーリネス教会設立

9・12　大江卓逝去（七五）

10月　土佐貯蓄銀行創立（昭和二年四国銀行に合併）

11・4　原敬首相、東京駅前で暗殺

12・28　松尾富功祿、市長に就任

自主上映活動が映画製作を夢見る行為とは？

田辺浩三

八七年十月二日付の高知新聞に〝秋水の映画化に意欲・森崎監督中村のゆかりの地回る〟なる見出しで、この土佐の生んだ無政府主義者幸徳秋水が映画化される可能性もある旨が報道された。この話の経過を説明する為にも、八七年における県下の自主上映活動の凄まじい熱気の数々から紹介する事にしよう。

まず私は七年前、原発騒動の町で映画館も無い窪川に、映画は二〇世紀の人類が生んだ芸術分野との精神にて窪川シネマクラブを結成、今までに黒沢明監督の『生きる』を初め名作を六十五本文化活動として上映。昨年は五月十日に今井正監督を招き、講演と彼の『婉という女』を四百二十名の観客を集め上映し、翌日は窪川高校で監督の『海軍特別年少兵』を総見。上映後、監督がこの映画のテーマ＝戦争について全校生徒の前で授業をする。この事はＮＨＫのテレビドキュメントとして広く紹介された。

まあ手前味噌は程々にして、次なるビッグな催しは高知市内に住む一主婦内原理恵さんと映画ファン二十六名が集い、八月二十二日、日本を代表する映画監督大島渚氏を高知市に呼び、講演と高知ロケ作品『少年』を上映しナント、ホール満員の五百名の観客が集まった!! いやはやこの成功には魂消たの一言（この催しには高知市文化振興事業団が共催として協力）。

なお高知市内には、高知映画徹底研究会（斉藤信幸監督・石川均監督など実力ある若手を招く）、ムービークラッシュ、高知映画鑑賞会、黄昏キネマ工房、高知キネ旬友の会などがあり映画興行衰退に反比例するが如く、昨年はなお一層、自主上映熱は活気を帯びて来る。

がしかし、これらの自主上映活動すらも色褪せてしまう程の事件が発生。なんと昨年二月に中芸シネマクラブが裏で動き、その地区で「中岡慎太郎を表舞台に出す会」を結成してしまい、三千万円のカンパを集めヌーベルバーグの名匠吉田喜重監督にて、『幕末に生きる―中岡慎太郎』を記録映画として製作させてしまった。この様な行為はその困難さ及び有形無形の影響力を考えると、県下での八七年一番の文化的価値を感じる。

さて秋水の映画化であるが、実はこの慎太郎の映画化が中村に住む幸徳秋水研究家の人々に多大なる刺激を与え、私に五月下旬この件で相談が持ち込まれた。秋水は社会主義思想に傾き、日露戦争中、非戦論を唱え活発な反戦活動をするが、明治政府は彼の存在を煙たがり大逆事件の濡れ衣を着せ、彼ら一派を処刑した。大逆事件という暗いイメージを一掃する為にも、明るく楽しい映画化が条件。それ故喜劇を得意とする森崎東監督に白羽の矢が立つ。監督はちょうど松竹で『塀の中の懲りない面々』（昨夏二十億円の大ヒット）を製作中であったが、ＯＫ。

この様な訳で中村のメンバーが監督を教育委員会主催として、十月一日の文化講演会の講師にしてしまい、ついでに彼の代表的喜劇『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』を上映、大勢の中村市民が鑑賞した。

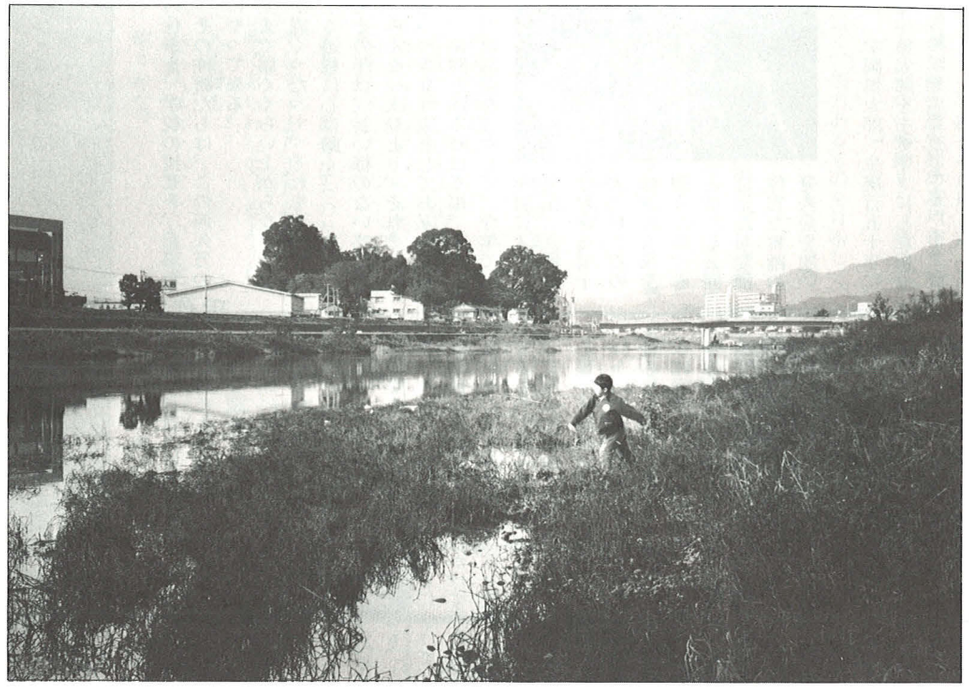
そして秋水映画化に向けて具体的な話し合いがもたれた。その結果、①脚本は地元の研究家が書き、中村出身中島丈博氏にそれの手直しを含めた数々の協力を仰ぐ為の場を持つ、②予算は明治時代を再現する為にも一億円、③俳優・スタッフは低予算で監督が集め、三～四年掛かりで取り組む―ことになった。早速、十一月三日、佐賀町へ来高した井上陽水（秋水とは遠縁に当たる）に対し、メンバーはこの件の協力をお願いする為にあの手この手で画策……。

これが、新聞記事の事の顛末である。秋水の映画化は夢で終わるかも知れないが、この土佐には歴史上の大人物が沢山続出。だから慎太郎・秋水などの生き様を知らせる行為は、その先輩達の生き方の魅力にて高知県を全国にアピール出来るし、また県下の若者達に対し健全な精神・郷土愛の意識向上も図れる。これぞ国民休暇県構想の大道と考えるが如何に？ 高速道路開通及び大岐の浜開発が目玉になる様な自然破壊的精神構造では悍ましい。

（窪川シネマクラブ代表）

私の風景

岡村　亨



新月橋

小学生時代から、通学、通勤に毎日渡ってきた。だから、懐しいものと同じく、新月橋はいつも遠くにある。

もっとボディビル

細川佐代子

近ごろ、繁華街を歩くと目にとまる、異常にやせたり、太ったりの不健康そうな人々。イイ体格の人は皆無に等しい。そんな人を見ると、近づいて行って、『ボディビルやりませんか』と声を掛けたい衝動にかられる。唐突にこんなことを言うと、相手はヘンな顔で逃げるだろうから、ぐっとこらえる。

高知は気候も温暖で、海の幸、山の幸にも恵まれ、ボディビルをやるには打ってつけの所だと思うが、どうも他県に比べ、競技人口も少なく、レベルも低い。熱しやすく冷めやすい土佐人の気質には、気長な努力が必要なこのスポーツは合わないのかもしれない。

以前、長崎のジムに居たころはよく、三菱のラグビー部に出張指導に行ったり、地元高校の柔道部がウェイトトレーニングの勉強に来たりしていたのだが、高知のジムではそういう気配がない。高知県のスポーツ界が低迷している原因は、技術力よりもパワー不足であることは誰の目にも明らかなのだが……。

ところで、ボディビルというと派手に見られがちだが、実際は地味なスポーツである。特にオフシーズンと呼ばれる冬場は来年の夏に向け、パワーアップ、バルクアップ（筋力、筋量を増す）を心掛け、規則正しいトレーニングに励まなければならない。一朝一夕には写真で見るような素晴らしい体型にはなれないのである。

しかし、その努力が実り、思い通りに体が変わってくれば、自然と自信が湧いてくる。表情が明るくなり、気持ちに張りが出てくる。今まで存在しない自分を発見する。

背中を丸め、ポケットに手をつっこんで歩いていたガリガリの男の子が、一年もすれば倍ほどに厚くなった胸を張って闊歩しだす。太って太って家から出るのも恥ずかしく、好きな服も着られなかった女の子が、一〇kg以上もやせてハイレッグの水着で海へ行く。

少し時間はかかるが、確実に変身できる素晴らしいスポーツなのである。

でも、一番変わるのは、健康を勝ち得てはじめて生まれる、己の生に感謝する〝こころ〟であり、人生を前向きに切り拓いていこうとする〝精神力〟ではないかと思う。

（日本ボディビルダーズ連盟指導員）

伊野友美子舞踊研究所

モダン・ダンスは自分の心

伊野友美子

舞い。

一日の仕事を、学校の授業を、家事を済ませ、その仲間たちは、この西久万の練習場にやって来る。

足が空まで届くくらい上がらなくたって、腰が固くったって、それを可能にしようとする過程に心は動く。

そしてその汗は、言い様のない感動を与える。みんな一人ひとり、それぞれなのだ。思いっきり呼吸をしてお互いを感じながら、仲間と踊る時は幸福。

私がこの舞踊団を設立して、今年で八年目に入る。現在、会員数はおよそ三十人。日ごろの修練の成果を問うため、春と秋の年二回、自分たちで創作した舞踊の発表会を開いている。

昨年は「中岡慎太郎」生誕百五十年にあたって、慎太郎をモチーフにした振り付け、創作舞踊を、安芸市や室戸市で踊ったり、桂浜のお月見会で踊ったりした。

野外で踊ることは、室内とはまた違った感興を体内に呼び起こし、肉体と自然の融合というようなことを皮膚で感じ取ることができる。

とにかく舞い踊っている時は、最高の気分。現実を離れ、すべて無となる。肉体が動かされている時、心は解き放たれ、そして皮膚が、瞳が輝き始める。今まで気付かなかったものに感動をし、足ははずむ。

大地に近く、迫力あるものを目指して、宇宙の中での何かを感じていきたい。そんな世界を共有してみませんか。

（伊野友美子舞踊研究所代表）

連絡先　七三―四四一六（伊野）

現代詩を読む会

秘密の鍵を探して

近沢　有孝

私たち「現代詩を読む会」は、名前のとおり、現代詩の愛好者たちが集まってすぐれた作品を読み、研究している、ちいさな読書会です。

時間に追われる気ぜわしい生活をしている私たちにとって、現代詩は、いわば砂漠に咲いた一輪の花のようなものでしょう。それがあることによって別に生活が豊かになる訳ではないけれども、ふとした時にそれに触れることによって、無感動な日常の中で失いかけていた人間らしさのようなものを、取り戻すことができるのではないでしょうか。

またそれと同時に、ひずんだ現代人の心理や社会の矛盾などを厳しく批判する、コトバの針となることも、現代詩の可能性のひとつとしてあるのです。さまざまな比喩や抽象的な表現は、よく現代詩批判の的にされるものですが、真実、熱心な読者が未知の世界と新鮮な感動とに出逢うための秘密の鍵として、私たちの前にあるものなのです。

今、私たちは、二ヵ月毎に集まって、「現代詩文庫」シリーズ（思潮社）をテキストに、それぞれの詩人像と作品とについての、熱のこもった意見を交換しあっています。一篇の作品を読むことによって新しい真理を掴みとることの喜びを、私たちは共有しています。

現代詩は、きらめく感性をもった読者を求め続けています。みなさんの秘密の鍵を探し出すために、私たちの読書会に参加していただけることを、期待しています。

（現代詩を読む会会員）

連絡先　七五―六〇三八（ふたば工房）

高知地理同好会

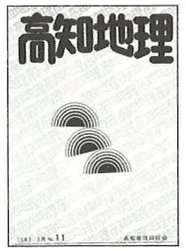
地理を生活に生かそう

寺尾　茂

「地理は暗記物」とよく言われますが、これは地理の一面を指したもので、自然と人間との関係を理論化するという他の一面が見落とされています。寒地には寒地の暮らしがあり、暖地には暖地の暮らしがあります。山には山、海辺には海辺の生活が開け、デルタの上の都市は、それなりの問題を抱えて苦しんでいます。

家を建てようとする人は、どこに宅地を求め、何坪の家をどこへどの向きに建てるか、庭に築山を造るか、何の木を何本植えるかなど、土地の性質に応じて考え断定しなければならないことがいくつもあります。

地理とは「その土地の特性に応じて、合理的な生活を実現してゆくはたらきである」―私たちは、この様な生活に結びついた市民の地理を求めて出発しました



発足当時百五十名を数えた会員は、現在およそ半分に減りましたが、それでも年二回以上、相互研究会、研究発表、意見発表、現地巡検、講演を聴く会などを行い、一方で、機関誌『高知地理』を公刊し市販も行っています（現在十一号）。会費は年間二千円、入退会は自由。会員の中には医師、行政書士、学校の先生及びOB、商店主などいろいろで、その点全国的に注目されています。

高知は、明治八年東京大学の地理学教室ができた時初代主任教授となり、数々の地理学者を育て、日本近代地理学の祖と景仰されている山崎直方先生の出身地です。その因縁からも、今後ますます同好の絆を強め、地理を生活に生かしたいものです。

（高知地理同好会会長）

連絡先　三二―四八六六（恒石）

ラボパーティ

ことばがこどもの未来を作る

門田　弘子

ラボパーティは一九六六年「ことばがこどもの未来を作る」を合言葉に、全国的に組織されました。物語との出合い、人との交流を通して、自分自身を豊かに表現できる青少年を育成することを目標としています。

高知では一九七一年に第一号のパーティが誕生し、現在五パーティ、幼児から大学生まで約七十名の子供たちが、外国語と日本語で語られる物語テープを楽しみながら、パーティ活動に励んでいます。外国語を習得する場合も、赤ん坊が母国語を自然に習得するのと同じように、耳から音になじみ、発語することはできないのか？　その為の教材として、子供たちが繰り返し楽しんで聴ける物語を取り入れました。その物語をグループで再表現することにより、次第に外国語を身につけていこうとする試みです。春、夏、冬と全国規模のキャンプに参加し、子供たちは日本各地に友達の輪を広げます。十二歳になると、アメリカ、オーストラリア、中国の青少年との交換

ホームステイのプログラムがあり、子供たちは外国にもう一つの家族を作ります。早くから異文化に触れることにより、自主独立の気を養うために、一人立ちへの旅へ乗り出して行くのです。

発足以来二十年間の歩みの中で、巣立った子供たちは全国数十万人。外国語を自然に話し、日本の文化と異文化を共有し、広い視野をもった青年たちが社会の様々な分野で活躍しています。

（ラボチューター）

連絡先　八四―一一一二（門田）

二人はわかい

江ノ口小学校　五年　川窪　渉子

祖父と祖母が
顔をにっこりさせながら
『二人はわかい』という歌を
歌っている。
まるで、自分たちのなかのよさ
そして、まだまだわかいということを
歌であらわしているようだ。
父も母も
『二人はわかい』という歌、
歌うかな。
私も『二人はわかい』という歌、
歌うかな。

風伯

街のオアシス

久し振りに高知の街を歩いてみた。買い物や何か目的があって行くのもそうだが、これといった目的もなくただブラブラと歩くのもまた愉しいものだ。

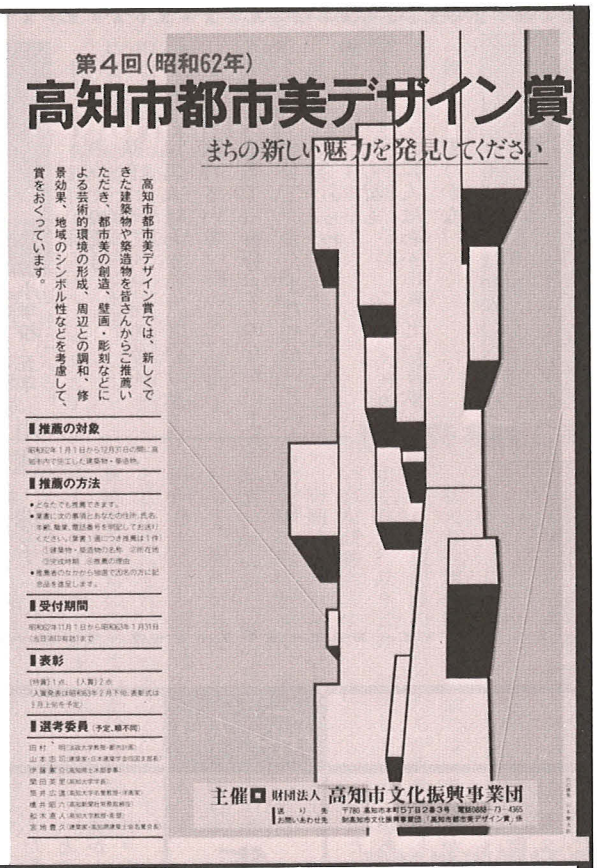
ところが、これが結構疲れるのである。中種から大橋通りあたりまで行くと、本当にグッタリしてしまう。改装されて明るくなったとはいえ、天井のあるアーケードは圧迫感があるのかとも思うが、原因はそうではないらしい。要するに、腰をおろして休めるところがないのだ。商品を見る時は歩いていなくとも、立ち詰めなのは変わりがない。

喫茶店があると言われるかもしれないが、ちょっと一休みにいちいちコーヒーを飲む訳にもいかない。公園はというと、中央公園（改造中ではあるが）、帯屋町公園ともに、休んでいく気分にはなれないし、第一寒風の中、公園に座ろうとは思わないではないか。

何とか工夫して、商店街の中にゆとりのある空間が確保できないものだろうか。〝市民の憩いの広場〟とでもいうような。けばけばしい音も装飾もなく、誰でもが安心して休めるところ。そこには清潔なトイレが必要だ。赤ちゃんを世話するコーナーもいるだろう。商店街の利益もというのなら、スペースをとらないカタログショップを設けよう。

そして何よりその広場には、文化的な香りが欲しい。そこに立ち寄ればいつも何かがあり、ちょっとした発見がある。そんな広場があれば、街歩きはもっと楽しくなるはずだ。

商店街にと書いたけれど、公園にしても、街全体にしても同様だと思う。街に大きな緑は不可欠だが、小さな緑、人が水を求めて集まるオアシスも必要ではなかろうか。（佑）



事業団では、新しくできた建築物、築造物を市民の方々から推薦して頂き〝都市美の創造、文化的・芸術的環境の形成、良好な町並みの形成、地域のシンボル性〟等の点を選考基準にして「高知市都市美デザイン賞」をおくっています。あなたの感性にかなう建築物を推薦して下さい。

●推薦の対象
昭和62年1月1日～12月31日の間に高知市内で完工した建築物・築造物。

●推薦の方法
どなたでも推薦できます。葉書に次の事項と、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記してお送り下さい。葉書1通につき推薦は1件とします。
①建築物、築造物の名称　②所在地
③完成時期　④推薦の理由

▼送り先、問い合わせ先
〒780　高知市本町5―2―3
(財)高知市文化振興事業団
「高知市都市美デザイン賞」係
電話0888―73―4365

なお推薦して頂いた方の中から抽選で20名の方に記念品を贈呈致します。

●受付期間　昭和62年11月1日から63年1月31日（当日消印有効）まで

●表彰　特賞1点　入賞2点（入賞発表は昭和63年2月下旬、表彰式は3月上旬を予定）

◆「自由民権百年第三回全国集会」（事業団、同実行委主催）を十一月二十一～二十三日、RKCホール、高知女子大・高知短大を中心に開催。自由民権運動の今日的意義等が討議されました。その評価については本号五ページをご参照下さい。

◆「ポーランドの〈子どもの目に映った戦争〉原画展」（事業団、高知一粒会主催）を十二月十五日から二十日まで郷土文化会館で開催。約四、〇〇〇名の方に原画をご覧頂くことができました。これに関連して十四日には前夜祭を開催。永六輔、秋山ちえ子、松島トモ子、小泉源兵衛各氏が平和の尊さを訴えました。また十九日には、ポーランド全国立博物館総管長のボイチェコフスキ氏の特別講演会を開きました。

▲15日朝行われたテープカット

熱心に絵を見る子どもたち▶

ポリクロスアート展 三月に開催

〈現代美術の様相と断層から〉と題した「ポリクロスアート展」を三月に開催します（事業団、郷土文化会館主催）。

これは、現代美術の分野において意欲的に作品を発表している高知県内外（高知、香川、愛媛、広島、兵庫、大阪他）の第一線作家の多様な作品を展示するものです。

作品は平面・立体・ビデオアートなど、素材もダンボール・御影石・木・紙・鉄・布などと多岐に渡っており、刺激に満ちた美術展になるものと期待されます。

●期間　昭和63年3月17日(木)～31日(木)　月曜日休館／午前9時～午後5時（最終日は4時まで）

●場所　郷土文化会館　2階展示室

●入場料　大人220円、学生90円、小学生40円

※なお関連企画として、大阪芸術大学教授高橋亨氏を囲んでの前夜祭とフォーラムも予定しています。

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8-14869